

# 野溝七生子『山榭』における山榭と白百合

西原志保

キーワード…少女、花、山榭、白百合

はじめに

本稿は、野溝七生子『山榭』における、山榭と白百合の機能を明らかにすることを目的とする。

『山榭』は一九二四（大正一三）年に『福岡日日新聞』の懸賞に入選し、選考委員に「真理が随所に撒き散らされてある」（徳田秋声<sup>注1</sup>）、「心と体と筆とがひとつになつてそこにかうした立派な火が燃やされた」（田山花袋<sup>注2</sup>）、全くの「夢物語」というわけではなく「現実と幻想とが不思議に美しく混淆して居る」（島崎藤村<sup>注3</sup>）と評された。一九二六年に春秋社より単行本として刊行された。

以後一九八三年に刊行された『野溝七生子作品集』（以下、『作品集』とする）に入り、一九九九年には高原英理によって「少女型意識の誕生」と位置づけられ<sup>注4</sup>、二〇〇〇年には文庫（講談社文芸文庫）として出版されるなど、近年再評価が進む。しかしながら、『作品集』解

説や解題、いくつかの評伝や評論があるのみで、本格的な作品論や読みはほとんどない。

そこで本稿では、『山榭』のなかで印象的に描かれる二つの花、山榭と白百合の描写を中心に、『山榭』の解釈を試みる。

## 一 梗概及び研究史

『山榭』は暴力を振るう父親のいる厳しい家庭で育った主人公阿字子が出るまでの物語である。阿字子は風変わりであるが背が高く、美しい娘として描かれる。

物語は幼い阿字子が高いところにある白く香り高い山榭の花を手折ろうとして、届かないところから語り始められる。彼女を抱きあげて山榭を手折ってくれた美しい娘（後に、子供たちから「魔法使」と呼ばれる寺の娘の「調」であることが明かされる）が、お蔵の二階に古い

書物があることを教えてくれる。本を読むことは、阿字子にとって生きることとなり、やがて彼女は遠いギリシャの神話にあこがれるようになった。しかしながら成長して女学校を卒業すると、父に味方して兄の結婚に反対したために兄や兄嫁と対立し、次第に追いつめられる。小説は死を強く願うようになった彼女が、家を出た場面で終わる。

主要な登場人物は、暴力をふるう父、優しい母、一貫して協力者である姉の緑、純粹で守るべき存在である妹の空、当初は理解者であったものの結婚後敵対する兄の輝衛、兄嫁の京子である。

「いかにも初心者らしく、そのポツン、ポツンとした印象派風の書き振りは、(中略)ひどくハイカラな持味の新鮮味を感じさせました」と評される象徴的な場面描写と、「論理的分析のゆきとどいた会話」「人工言語」と評される、説明的で理知的な文体が表現上の特徴である。

『山柵』は「近代の女人文学の原点であり、同時にこれ以上行く先のない到達点」とも評価される重要な作品であり、高原英理『少女領域』(一九九九年)を機に、近年再評価の動きが起ってきた。野溝が文学や学識によって対価を得ていなかった、まだ何者でもなかった頃に書いた初めての作品であるとともに、質量ともに充実

した作品であると言える。しかしながら、前記「選評」『作品集』解題・解説、栗のほか、本格的な読みや作品論はほとんどない。自伝的要素の強い作品であるとも言われるが、詳細な読みを進めてこそ、「少女型意識」において果たした機能も明らかとなると考える。

そこで本稿では、『山柵』のなかで重要なモチーフとして描かれる山柵と白百合の花に注目し、『山柵』の解題を進展させることを試みる。山柵と白百合は象徴的な場面構成の上で重要な機能を果たしており、山柵と白百合の考察を通して、『山柵』の機構を明らかにすることができらう。加えて、花は少女との関わりをはじめさまざまな文学作品において重要な機能を果たするものであることから、花のイメージの文学史にも、寄与するものとなるだろう。

## 二 「少女」と花

具体的な考察に入る前に、『山柵』を読む上で研究史上重要な概念となる「少女」、及び少女と花との関わりについて概観しておきたい。

『山柵』は「少女型意識の誕生」として位置づけられ、「少女」は研究史上でも重要な概念となるが、以下のように定義づけられる。純潔規範を課せられ、社会的再生

産のシステムから疎外される存在であり、学校制度の整備と教養主義とともに発生したこと、「少女」イメージには少女雑誌が大きく関与することが指摘される。<sup>(注10)</sup>修身教科書や少女雑誌から「少女」像を捉えた渡部周子は「就学期にあって、出産可能な身体を持ちつつも結婚まで猶予された期間」を「少女」期」と捉えると述べる。<sup>(注11)</sup>

「純潔規範」は「少女」を縛るものであり、矛盾である一方、望ましい女性役割から逸脱させる可能性をも孕む。少女たちがいつまでも少女のままでは、良妻賢母にはなれないからである。一生、あるいは夫に対してまで純潔であっては出産できない。「少女であること」への愛着は、子を産み育てる社会的再生産のシステムへの参与を拒絶させるのである。

矛盾に満ち、可能性が閉ざされているが故に逆に無限の可能性を持つ「少女」の在り方を、矢川澄子は

同年輩でも少年ならばどこかで囚われかねない義務観念や、立身出世、権力志向とかいったもろもろの上昇願望からも、少女は少女であるがゆえに自由であり、どこまでも純粹な観客の立場に徹することができるのである。<sup>(注12)</sup>

と述べ、高原英理は「性的な「分類」に「疑問を投げかける」<sup>(注13)</sup>」、江黒清美は「生む性からも社会的責任からも

解放された自由な存在」であるという。<sup>(注14)</sup>

『山梔』においても、強い純潔志向と結婚拒否の姿勢とともに、阿字子が「立身出世」や「権力志向」とも無縁である様子が描かれる。兄嫁の京子が結婚を嫌う阿字子を詰る場面、

「でも、結婚もしない、身を立てることもしないと  
なれば、いよ／＼親同胞の厄介ものだと言云るので  
すね。(中略)御両親のなくなりなすつたあととは、  
一体、誰があなたを引き受けなければならぬか  
御存じでせうね。」<sup>(注15)</sup>

を見ると、阿字子が単に結婚しないのみならず、立身出世も志向しないことが分かるだろう。<sup>(注16)</sup>

ここで、例えば吉屋信子『花物語』(一九一六〜二六年)などに見られるように、「少女」と花との結びつきが強いことを想起しておきたい。とりわけ「純潔規範」と深い関わりを持つと指摘されるのが、「白百合」の花である。

白百合の花は、「明治期の浪漫主義者」において、「恋愛(プラトニック・ラブ)の対象となる純潔な女性」および、「女性への思慕の念を通して喚起された芸術創造を象徴した」こと、さらに

明治末期から大正・昭和における少女の教育に波及

した際には、(中略)、将来の良妻賢母となる少女たちの身体を純潔のままに保持するうえで、の教化の象徴として、機能する<sup>(注18)</sup>

ことが指摘される。小説後半で白百合が描かれることは、阿字子の強い純潔志向と結婚拒否の姿勢から考えれば不思議ではない。白百合が阿字子の植えたものである(五七頁)ことを考えれば、「園芸」が女子教育において重要な役割を担ったとの指摘<sup>(注19)</sup>とも合致する。このような点から言えば、白百合の描写はおよそ典型的なものと見えよう。

一方で山梔は、古典文学の世界では『古今和歌集』巻第十九 雑躰歌にある、

題しらず

素性法師

1012 山吹の花色衣ぬしや誰問へどこたへずくちなしにして<sup>(注20)</sup>

など、「口なし」との掛詞から、何も言わないことを象徴する。

『古今和歌集』の場合は染料として用いられる山梔の実の意味合いが強く、『山梔』で印象的に描かれるのは、白く、香り高く咲く花であるが、「誰か」と尋ねても「口なし」で答えることができないというイメージも掛かっていよう。

冒頭の場面で阿字子に山梔の花を手折ってくれたのが、子供たちから「魔法使」と呼ばれる寺の娘、調である。調は何度も「誰か」(二三頁、三一頁、三五頁等)と呼ばれ、また阿字子も「何も云ひはし」ない「黙つて、中に貯へてゐる子」(二三三頁)であり、姉の緑に対し「言葉のいらぬ国に行きませうね」(二〇八頁)と言うからである。

吉屋信子『花物語』においても、「山梔の花」で描かれる少女は口をきけないことから、「山梔」口なしの連想は、当時においても一般的なものであったと言えるだろう。

花は古来女性の象徴となり、花を手折ることは女性を手に入れること、種や実が生殖を連想させる。他ならぬその花が、生殖を禁じられた「少女」の象徴として用いられたとき、どのように機能し、どのような変容をこうむったのかを考える上でも、ひとつの素材となろう。

### 三 山梔のイメージ

分析に際し、花と少女との重ね合わせという象徴体系と、花と書物がどのように結びついて描かれるか、という二つの観点から整理する。すでに述べたように、花と少女との結びつきは強く、これから述べるように、『山

「山梔」は幼い阿字子が高いところにある山梔の花を手折ろうとする印象的な場面から始まり、白百合の咲く家を出る場面で終わる。

山梔はぶんぶん薫つてゐた。子供は折りとらうとして、折りとらうとしていくたびも手を伸ばしたがやつと下枝の病葉にとゞく位に小さかった。

(中略) 一生懸命のその姿は、空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まうとしてゐるやうにも純潔であつた。

(中略) その年頃には何も彼もが生れて初めての経験であるやうに、白い山梔の花は、生れて初めて見た清い芳烈な花だと子供には思はれた。

(中略) 根氣よく、いく度となく伸び上り伸び上り、そしては小さな踵をすんと落して、又伸び上つてゐる子供の体を、後から突然に抱へ上げた、白い指の長い女の両手がある。

(中略) その時、すらくと花の着いたしなやかな枝が子供の額に触れて、芳香があたりに散つた。子供の頭の後には高い拡がつた空があつて、落日

のおごそかな光を、二人の上に投げてゐた。

女は子供を下に降すと、清らかな袖口から真直に腕を伸ばして白い花の枝を折つて呉れた。(二二頁)

山梔は、調が「山梔の下女」(二二頁)と呼ばれ、「調の噂を聞くこともなく、誰もきかせるものもなく年月は流れて行つた。阿字子は、山梔の花が咲く頃になると、どうしてゐるかと思ひ」(四〇頁)をする、とあるように、ひとまずは調を象徴するものである。と同時に、調にとって阿字子は「私の幼い時の鏡みたい」(二四頁)であることから、「山梔」は阿字子をも象徴するものだろう。

ここでは年かきの少女である調が幼い阿字子に山梔を手折つて与えるが、花を手折ることは、通常男性が女性を手に入れることを象徴する。<sup>(注1)</sup>

阿字子を通じて兄の輝衛と調が文通し、輝衛が調に求婚する後の展開を考えれば、阿字子を媒介として、調が輝衛に自らを与えることを象徴するとも考えられる。しかしながら、調と輝衛との縁談は調の父の拒絶によって実現しない。とするならば、調から阿字子に手渡されたのは何だったのだろうか。

山梔は清く美しく芳烈で手に届かないものとして描かれ、主人公はそれを必死で手に入れようとする。場面は

光に満ちている。「空の彼方」「高い空」「真直」など、

垂直の動きや視線が強調される。「星のやうに輝いた白い花」(一四頁)との表現も、手の届かない高い空にあるイメージを喚起するだろう。山梔が咲くのは寺の庭という区切られた聖域である。阿字子が寺の庭で「枯葉の堆積の中に、何か青い草の葉でも見つけると」、「その周囲に枯葉を堤にして丸く円を描いて王様のお庭」(二二頁)だと言って遊ぶ場面もあり、寺院の庭の聖域性を示している。「一生懸命」の姿、「空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まうとしてゐる」かのような姿が「純潔」と形容されることにも注意したい。「純潔」は白百合のイメージとも共通するが、白百合に象徴される性愛に関わる「純潔」とはやや意味合いを異にするからである。

ここで、調が阿字子に、祖父の遺した古い書物がお蔵の二階にあることを教えたことを想起しておきたい。阿字子は、

「あなたのおうちには、昔からの好い御本が、どつさりあるでせう。お祖父さんは、聞いた学者でいらしたのだから。」

(一八頁)

阿字ちゃん、私のところではね、古いものや仕様のないものなんぞと皆、お蔵の上に、ほり上げてし

まふんですよ。

(一九頁)

と教えられ、土蔵の二階で祖父の所蔵していた「草双紙や絵巻物」(同)を引き出す秘密の喜びを持つようになる。侍女が彼女を発見する場面は「夕方の光は、屋根裏を明るく一面に彩つてゐた」(一八頁)と描写されるように、明るい。土蔵の二階は、「壊れかゝつた危つかしい梯子」(同)を上がった先であり、書物が、高いところにある光に満ちたものであることを象徴する。調に教えられて書物を発見したこと、書物が高いところにある、光に満ちたものである描写は、冒頭で描かれる山梔と共通する。したがって、山梔は書物、殊に古い日本の書物の象徴としてあるだろう。ここでの書物が時間軸を遡つたものであることにも注意したい。

「夕照の燃えるやうな暑さも、本の譚ものがたりに気を奪はれてゐる子供には感じられなかつた。いつしらず土蔵の二階で、秘密に物を読み耽るやうになつてからは、阿字子の姿は母や姉の前から魔法のやうに消えて行つた」(同)とあるように、読書は阿字子を家族とは別の、違う世界へと連れていくものであった。母に屋根裏の書物を読むことを禁止され、「あの草双紙は、阿字子には、早すぎる」(二〇頁)と説明する姉の緑に阿字子は嘘を言い、後に兄が阿字子に本を買い与えたときにも、母は阿字子

が本を読み過ぎることを心配する。書物は阿字子を家族から引き離すものである。(注22)

#### 四 拡散する白百合

山梔の白く香り高い花は、冒頭でこそ印象的に描かれ、古い草子類などを象徴するが、物語後半では後景に退き、代わって白百合の花が描かれる。後半で主な舞台となるのはお蔵のある町の家ではなく、「お祖父さんの家」と呼ばれる海辺の家である。

海を下に見る高台に、ぐるりを白楊樹の並木ととりまかれた、空家のやうに荒れた変な恰好の——洋館ともつかず日本建ともつかない——大きな家が只一つ建つてゐた。それを子供等は「お祖父さんの家」と呼んで、今では夏の住居になつてゐる。(二九頁)

当初夏の別荘であつたが、後半では一家で移り住む。白百合は、

「来年は、どうしても、薔薇と百合とを作らなければ。」

「百合は、彼方の家から取つて来て、根を埋めて置きさへすればわけなしよ。」

「私、この窓から、眺められるやうに、百合の花壇を作るのよ。緑さん手伝つて頂だい。」(五七頁)

と言つて町の家から移植したものである。兄の友人である柏木が阿字子に求婚する場面で、

開け放した窓からは、白百合の芳烈な香がおそひ込んだ。二人はその窓に近く椅子を置いて永い間語り合つた。(二一八頁)

など、強い芳香が描写されることから、山梔とは白い芳香の強い花、という描写によつてつながっているだろう。阿字子の読む書物も、兄に買ってもらったことを契機に、古い日本の書物ではなく西洋の神話や伝説に変わつていく。

少し長くなるが、阿字子が家を出る前に妹の空に語つた物語を引用しておこう。

「昔、昔希臘とトロイが、戦争をしました。そんなお話さ。」(中略)

「オリムピヤの野に、百合がたくさんたくさん、咲いてゐました。そこにある百合よ。この百合さ。それから、希臘の年若い將軍が、たそがれの野を、真一文字に疾走を続けてゐました。將軍の故里の街では、母さんが門に立つて、その子がもたらして帰る戦勝の便りを、今か今かと待つてゐました。(中略)美しい処女が、(中略)愛人の帰りを待つてゐたの

でした。(中略) ああそこに、愛する処女が思つた時、將軍の膝はくづをれて、はたと百合の花叢の中に、倒れてしまひました。(中略) 身動きに槍の石突が、大きな百合の花に触れて、明星の影乍らに將軍の唇に、涙のやうな露がかゝつたのです。彼は、意識をとり戻しました。その処女だと思ふ、百合の花を、鎧の胸甲深く膚に納めて、將軍は、再び立つて、その疾走を続けました。そして故里の門に待つ、なつかしいお母さんの腕に瀕死の身を投げかけて、『勝つたのです。』と只一言、その儘は深く閉ぢられてしまつたのです。(中略)、あゝ將軍の、蒼い臉は再び、処女を見ることは出来ませんでした。美しいとび色の、長い睫毛を濡らして、処女の涙は將軍の上に散りました。あの、その、この百合の露のやうに。』

阿字子は、さう云つて、空を見て、百合を指して微笑した。

(中略)

「おしまひさ。何も彼もおしまひよ。それからね、それから母さんが跪いて、人々の手を借りて致命の傷手を、母さんの手で蓋する為に鎧を脱がしました。そして、脇腹を貫いた槍の穂先と共に血に塗れた、

大きな百合の花を取り出した時、処女は、それを一眼見ると、その儘、するすると倒れかゝつて、氣を失つてしまつたのでした。」 (二四一—二四二頁)

白百合は、阿字子の語る物語の中では故郷で待つ「美しい処女」を象徴するものだろう。阿字子が家を出ようとする場面であることを考えると、將軍は阿字子、待つ処女は妹の空、母は姉妹たちの母であるといつてしまふ。聖杯伝説に関し、阿字子が「革帯」を見た騎士に自らをなぞらえる場面もあり、阿字子自身はあくまでも「騎士」や「將軍」として自らを位置づけている。

ただし、白百合の持つ「純潔」のイメージは、不可避的に恋愛と、阿字子自身を白百合に喩える物語を呼び込む。兄の友人である柏木が阿字子に求婚する場面は、強い白百合の芳香とともに描かれる。柏木は「純潔な私」を阿字子に捧げることができないことを嘆き、純潔な阿字子に受け入れられることによって、「純潔な私」を取り戻すことを夢想する。したがって、柏木の物語において白百合に象徴される純潔な少女は阿字子だろう。しかし阿字子は柏木を拒絶し、白百合であることを拒絶する。かつては姉の緑が柏木に思いを寄せていたことが暗示され、現在は妹の空を柏木の相手として考えているように、阿字子にとって柏木との関係は、姉妹関係との関わり



中でしか考えられない。

緑のこともなく、阿字子の事もなく、只空と晃（＝柏木、引用者注）とだけを切りはなして考へる時、

阿字子は、百合の花壇の中で、その香に埋もれてゐる時のやうな幸福を感じる。（二一〇頁）

一方で、みずからは望まない結婚を妹には望む矛盾が苦く意識されてもいる。

お、仮りにも空を、あの人に並べて、辱めていいものか。空は赤ん坊よりも純潔だのに。（二二五頁）

自らを騎士や將軍のよくなものと思ひ、妹を故郷で待つ純潔な恋人に喩える態度は、抑圧を孕んだものでもあるだろう。

柏木との場面においては、幼いころの阿字子と会ったときが回想されることから、百合の香は過去を喚起するものである。しかしながら阿字子の語る物語においては、「あの、その、この百合」とあるように、百合は遠いギリシャと眼前の風景とを結びつけるものとして機能する。遠い時空を引き寄せるための装置として機能すると言えるだろう。

山梔が祖父のものだった古い日本の書物を象徴するのに対し、百合は遠い西洋の神話や伝説と結びつく。ここでは「トロイ」「オリムピヤ」などギリシャ神話の地

名が登場するが、聖杯伝説に言及される場面もあり、漠然とギリシャに代表される古い西洋の神話や伝説がイメージされるものだろう。山梔は過去の時間と結びつき、百合は空間的な距離を超越するものと整理できる。また、山梔はあくまでも場面構成上古い日本の書物に相当するものであるのに対し、百合は場面構成上の機能は一つに定まることがないものの、阿字子が読み、語る物語のなかで具体的に描かれる。高いところにあり、折りとつて手に入れなければならなかった山梔の花に対し、百合の花はそこにあり、阿字子が植えて育てたもの、また阿字子が語る物語のなかでは故郷にあるものとして描かれる。

ただひたすら読むものであった古い日本の書物に対し、西洋の神話や伝説に関しては、妹の空に語ってきかせることにも注意すべきだろう。

空に、語るこの時間こそ、一日のうちの最も楽しい時刻であつた。

（中略）

どの物語も、阿字子は決して終りまでは語らなかつた。

（五九頁）

山梔が「口なし」の、答えることができない言葉の意味するのであれば、百合は妹に語られる物語とともに

ある。そしてそれは決して最後まで語られることがない。

以上見てきたように、山梔と白百合は「純潔」な、白く香り高い花の描写によってつながっており、山梔は古い日本の書物を象徴し、白百合はギリシヤなど西洋の神話や伝説と結びつく。それぞれ時間的な隔たり、空間的な隔たりを超越するものと整理できる。山梔の「純潔」は、「空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まう」とするものであり、白百合の「純潔」は恋愛や性愛に関わるものである。

白百合に象徴される純潔規範は、純潔でありながら恋愛を志向する矛盾をはらみ、白百合の咲く家を出る『山梔』の結末も破綻を印象づけるが、『山梔』があくまで『山梔』として提示されることは、「空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まう」とする物語に最終的には回収されるものといえよう。

同時に、山梔は『古今和歌集』にある「山吹の花色衣ぬしや誰問へどこたへずくちなしにして」など、「口なし」との掛詞から、「誰か」と呼ばれる調と、何も言わないで内向する娘である阿字子を象徴する。白百合の花は「純潔」の象徴という典型を踏襲しつつ、阿字子の物語においては妹の空の象徴であり、阿字子自身は白百合を象徴することを拒絶する。重要なのが、白百合と

もに語られる「お話」が、阿字子によって妹の空に語られるものであることだ。

世間で京子に対して答える言葉を持たず、何も言えない阿字子は、妹の空に対しては饒舌に空想の物語を語る。したがって、「山梔」と「白百合」の物語は、「口なし」であった阿字子が内に貯えていた物語を、語る言葉を模索する過程と言えるだろう。

ただし、『山梔』においては、「読む」と対になるはずの「書く」とことへの意識は、極めて希薄である。『山梔』という小説が、書かれたものとして存在する以上、そしてそれが自伝的なものとして位置づけられるのであればなおさら、「書く」とことへの意識の希薄さは、この作品を特徴づけるものとなるだろう。『山梔』が自伝的な作品であるならば、阿字子が『山梔』を書いたと解釈しうるからである。また、『山梔』は阿字子の視点で語られる以上、『山梔』を誰かが書いているのだと考え、書く存在を小説の中に設定するならば、『山梔』という小説は阿字子が書いたという設定で書かれているとも言える。

阿字子がものを書くのは、柏木の求婚を断った後、姉の緑に養子としてもらえるよう申し出た手紙（二二三―二三四頁）のみである。この時点で、緑がすでに家を出

た存在であることに注意したい。「書く」ことへの契機は、白百合の花咲く家を出、妹に物語を語る機会が失われてはじめて、生れるものだと見えよう。

おわりに

以上、野溝七生子『山梔』における山梔と白百合の描写を辿り、その意味を考察した。『山梔』は、近年「少女」という観点からの再評価が進むが、本格的な読みや作品論はほとんどない。また、「少女」と花との関わりは深く、殊に「純潔」を象徴するのが白百合の花である。『山梔』においては山梔と白百合が重要な場面で描写される。そこで『山梔』における山梔と白百合の描写を辿り、その意味を明らかにすることで、読みの更新を試みた。

山梔と白百合は清く美しく、白い芳香の強い花という点で描写が共通する。白百合の花は一般的に純潔の象徴とされ、山梔に関しても阿字子が山梔を折り取ろうとする姿が「純潔」と形容される。ただし白百合の純潔性は性愛や恋愛に関わるものであり、山梔に関しては、「空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まう」とすることが「純潔」とされる。

山梔は年かさの少女である調が阿字子に手折って渡し

たものであり、お蔵の屋根裏に祖父の遺した草双紙や絵巻物があることを教えた描写から、古い日本の書物を象徴する。一方で後半描かれる白百合は、西洋の神話や伝説と結びつくものだろう。山梔に象徴される古い日本の書物は時間が隔たった過去のものであり、一方で白百合の描かれる西洋の神話や伝説は、空間的に遠く隔たった異邦のものである。

また、山梔の花は『古今和歌集』にある

1012 山吹の花色衣ぬしや誰問へどこたへすくちなしにし  
て

など、「口なし」との掛詞から、「誰か」と呼ばれる調と、何も言わないで内向してゆく阿字子を象徴する。一方で白百合は、阿字子が妹の空に語る「お話」とともに描かれる。

後半で調は遠くに去り、山梔の花は描かれず、阿字子は古い日本の書物を読まないが、阿字子は世間や京子に對して語る言葉を持たず、何も言わないままである。また、読むことと對になるはずの書くことへの意識は希薄である。『山梔』と言う小説が書かれたものとして存在することから、「書くこと」の意識の希薄さは特徴的なものといえる。「自伝的」な作品であるならば、『山梔』を阿字子がその後書いたものと考えられるからである。

したがって、『山梔』とは、何も言わず、自らの言葉を持たなかった少女が心に貯めていた物語を、指すものだろう。語ることの挫折ののちに、書くことを獲得したことが暗示されるのである。と同時に、白百合にイメー  
ジされる性愛に関わる「純潔」の物語を経ながらも、「空の彼方にまで遠く腕を伸ばして何物かを掴まう」とする物語であったと言えよう。

## 注

(1) 『福岡日日新聞』一九二四年八月七日(〈参考資料〉野溝七生子論集)『野溝七生子作品集』一九八三年、立風書房)。

(2) 同右、八月一三日。

(3) 同右、九月三日。

(4) 「少女型意識の誕生——野溝七生子『山梔』一九二四」『少女領域』一九九九年、国書刊行会)。

(5) 神近市子「時感二三」『読売新聞』一九二七年六月一日(〈参考資料〉野溝七生子論集)注1参照)。

(6) 鶴見俊輔「コスモポリタニズムの先行者」(『野溝七生子作品集・栞』注1参照)。

(7) 久世光彦「山梔伝説 野溝七生子」(『昭和幻灯館』一九八七年、晶文社)。なお、「女人文学」という用語には若干

問題がある。

(8) 注4参照。

(9) 近年江黒清美による初めての本格的な研究(『由布阿字子・『山梔』野溝七生子』『少女』と「老女」の聖域——尾崎翠・野溝七生子・森茉莉を読む』二〇一二年、學藝書林)が刊行されたが、「少女」という観点による、ジェンダー論的な評価・位置づけを主眼としたものである。『山梔』そのものの考察ではなく、野溝七生子についてのものに、親族の一人である林礼子が思い出を語った『希臘の独り子——私にとつての野溝七生子』(一九八五年、私家版)、個人的に交友のあった矢川澄子による評伝『野溝七生子というひと——散けし団欒』(一九九〇年、晶文社)がある。

(10) 例えば本田和子は女学校によって女学生の集団が出現したことおよび、「明治三十年代に簇出した少女雑誌群」が「少女共同幻想体」の成立に関与した(『女学生の系譜——彩色される明治』一九九〇年、青土社)、大塚英志も同様に「明治三〇年代、女学校令という学校制度と女性雑誌というメディアによって二重に囲い込まれる形で〈少女〉は誕生する」と述べる(『少女雑誌論』一九九一年、東京書籍)。今田絵里香は、「少女」は経済力とともに、西欧文化と教養主義的な文化という新時代に光輝を放つ文化を込められた(『少女』の誕生——少女雑誌以前)『少女』

の社会史』二〇〇七年、勁草書房、初出『教育学研究』二

〇〇四年六月）者であると言ひ、「女学校に通ひ、少女雑誌を買い与えられていた女子」を少女とし（「序章」同書、

修身教科書に登場するのは「女子」、高等女学校に存

在するのは「女学生」であり、「少女」ではない。（中

略）「少女」というジェンダー・アイデンティティを

創出し、それに独特の意味を与え、非常にポジティヴ

な語としてさらびやかに装飾したのはほかでもない少

女雑誌であった（同）

ことから、少女雑誌を必要不可欠なものとす。他に川村

邦光『オトメの祈り——近代女性イメージの誕生』（一九

九三年、紀伊國屋書店）、稲垣恭子『女学校と女学生——

教養・たしなみ・モダン文化』（二〇〇七年、中公新書）

などに指摘がある。

(11) 『〈少女〉像の誕生——近代日本における「少女」規範の形成』（二〇〇七年、新泉社）。

(12) 「解説——「わたしひとりの部屋」から——」（『野溝七生子作品集』注1参照）。

(13) 「序 少女型意識——自由と高慢」（『少女領域』注4参照）。

(14) 「博士論文を書き終えて 老少女文学論序説——尾崎翠・野溝七生子・森茉莉における「少女」表象の考察」（『Rim』

一一（一）、二〇〇九年）。

(15) 二三二頁。引用、頁数は『野溝七生子作品集』（注1参照）による。ただしルビなど一部省略した部分がある。

(16) 高原英理はこの場面について、

京子らの、世間からはみ出まいはみ出まいとする意図も、もとをただせば当時の女性が自ら生活の資を得られないという最大の屈辱から発生していたことをこの言葉はあらわにする。

（中略）女性が自活できる道があれば阿字子の受難はなかったかも知れないのだった。（注4前掲）

と述べ、当時の女性に職がないことが、結婚に迫られる要因とする。しかしながら、（できないではなく）「立身出世もしいない」との表現に着目するならば、必ずしも就職が全くないことを示しているとは言えない。戦前の婦人雑誌を調査した木村涼子は、

男性の立身出世主義の隆盛をサポートしたマスメディアは、女性に対しても彼女たちを業績主義の渦に巻き込むような価値観を提示していたのではないだろうか。

（『主婦の規範〈修養の章〉』、『主婦〉の誕生——婦人雑誌と女性たちの近代』二〇一〇年、吉川弘文館、初出『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第七号、一九八九年）と指摘するが、就職は業績主義や立身出世という社

会構造への参入を意味する。例えば教師は当時において女性  
性が就くことのできる職業のひとつであったが、女学校時  
代阿字子はその奔放さで教師に嫌われた。

何しろ、四年間に十二回の学期末を通じて、只の一度  
も主席といふことに、出会いはなかつたのは、それは、  
どうしても至当としなければならなかつたほど、不勉  
強な生徒ではあつたのだ。

(七二頁)

とあるように、勤勉さや業績主義とは無縁である。阿字子  
は結婚や労働の対価としての経済性に身体を還元する思考  
そのものを拒絶するのである。

(17) 渡部周子「浪漫主義文学と美術における「少女」像」  
(注11前掲書所収)。

(18) 渡部周子「白百合に象徴される規範としての「少女」像」  
(注11前掲書所収)。

(19) 渡部周子は「少女は、園芸を通して新たな生命を育み、  
愛護することを学ぶことが可能だと考えられていた」と述  
べる(「実践教育としての「園芸」——ケア役割の予行」  
注11前掲書所収)。

(20) 引用は新編日本古典文学全集による。

(21) なお、渡部周子は「美しいが手折ることの許されない観  
賞用の花に比喩される少女とは、美しいが男性が触れては  
ならない少女の純潔さを象徴している」(注19前掲論文)

と述べる。

(22) 川村邦光は、活字を媒介にして、個々人の想像の世界で  
ある「心の小座敷」が形成されると指摘する(注10前掲書)。

(にしはら・しほ／名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期  
課程修了)